

テーマ： 国分寺市役所新庁舎建設について

所 属：国分寺市 政策部 公共施設マネジメント課

1. 新庁舎建設の経過

現在の国分寺市役所は、昭和 38 年に建設された旧本庁舎が耐震性の問題から閉鎖・解体され、庁舎が市内各所に分散し、市民にとって不便であるだけでなく、有事の際の対応拠点としての機能が不十分であり、迅速な災害復旧活動等が困難な状況となっている。こうした課題を解決するため、新庁舎を早急に建設する必要があった。そこで「国分寺市新庁舎建設基本構想」（平成 31 年 3 月）及び「国分寺市新庁舎建設基本計画」（令和 2 年 8 月）を策定し、これらに基づき新庁舎建設工事を実施した。また、新庁舎を建設するに当たり、現庁舎敷地より南におよそ 2 キロの場所にある、泉町の公有地を購入して新庁舎建設敷地とし、市役所を移転することとした。

建物概要

所在地：国分寺市泉町 2-2-18

敷地面積：12,623.72m²

延べ面積：21,786.89m²

階数：地下 1 階、地上 5 階

構造：地下 RC、地上 S 造（一部 CFT）、免震構造

発注方法：設計・施工一括発注方式

施工者：竹中・石本・セット設計 JV



図 1 位置図

2. 新庁舎建設の概要

(1) 発注方法

新庁舎建設に際し、市に対して最も有利な調達を行うため、より価値の高い契約を行うことが求められた。また、工事の品質に関しては受注者の技術的能力によるところが大きく、高い技術力を有する民間企業のノウハウを有効に活用することにより、建設コスト縮減や性能・機能の向上、更には工期短縮等の施工の効率化等が図られることとなる。

こうした理由から、構造物の構造形式や主要諸元も含めた設計と施工を一括で発注する方式を採用することにより、民間企業の優れた技術を活用し、設計・施工の品質確保、合理的な設計、効率性を目指すこととした。

この発注方法を採用したことにより、従来方式と比較して、実施設計や施工の発注にかかる期間を短縮することが可能となり、契約締結から 3 年 6 か月という期間で竣工に至った。また、施工者が決まっていることから実施設計中にも資材の先行発注が可能になり、契約締結当初のスケジュール通りの工期で竣工できたことに加えて、施工中に生じた様々な変更等の対応に設計者が関与することにより、円滑に対応することができた。

(2) 庁舎計画

新庁舎建物は、地区計画に適合するため高さを 25m に抑える必要があった。そのため、階数を地上 5 階とし、必要な床面積を各階に振り分けた合理的な長方形の建物形状とした。

階層計画については、市民利用の多い窓口機能を 1・2 階に配置し、市民の利便性向上

を図っている。3・4階は土木建設系部署や行政・企画部署などを配置し、災害発生時の対策拠点となる災害対策本部室と連携のとりやすい配置とした。最上階の5階には独立性に配慮し、議会施設を配置している。地下は免震層階高を活用した来庁者用駐車場とすることで、荒天時も雨風に影響を受けないアクセスを可能とした。

構造は、防災・災害復興の拠点となることや災害時の行政機能の継続性から、免震構造を採用した。これにより、日本各地で繰り返し発生する地震への対応や、設備機器・配管の保全や家具・什器等の転倒を最小限とする効果を見込んでいる。またインフラの冗長性を確保するため、電力の多重化（高圧2回線引込み）や太陽光発電設備を備え、また、災害に強い中圧ガスを採用した。中圧ガスは、ガス混焼型の非常用発電機に供給されることとなっており、軽油と混焼して電力供給の長時間化（168時間以上）を図っている。

その他、誰もが快適で利用しやすい庁舎とするため、ユニバーサルデザイン（UD）を取り入れ、ピクトサイン、音声誘導案内、トイレの機能分散配置、クールダウン・カームダウンスペース（音と光を抑えた個室）等を導入した。

これらの導入に当たっては、有識者や障害者団体、障害当事者が参加するUDに関するヒアリングや検討会を複数回開催し、直接意見を交換しながら検討を進めた。右の写真のように、点字ブロックに150mmの間隔を開けることで、車いす利用者が通りやすいよう配慮するなど、視覚障害者と車いす利用者がお互いの利便性の妥協点を見出すなど大きな成果があった。

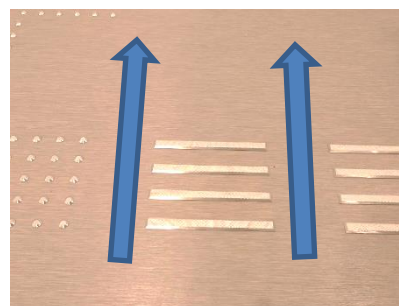


写真1 意見交換の結果を反映

（3）環境計画

発注時の要件として、環境負荷を抑え、省エネルギーに配慮した庁舎とすることを要求した。自然エネルギーの積極的な活用や高効率機器と省エネルギー制御の組み合わせにより、設備機器のエネルギーを抑える計画とし、多摩地域の市役所庁舎では初めて、ZEB Ready 認証（創エネを含み一次エネルギー使用を68%削減）とCASBEE-S ランク認証

（4.2ポイント）の両方を取得した。太陽光発電パネルは約170kWを備え、発電電力をより効率的に使用し経済効果を得るため、蓄電池も装備した。

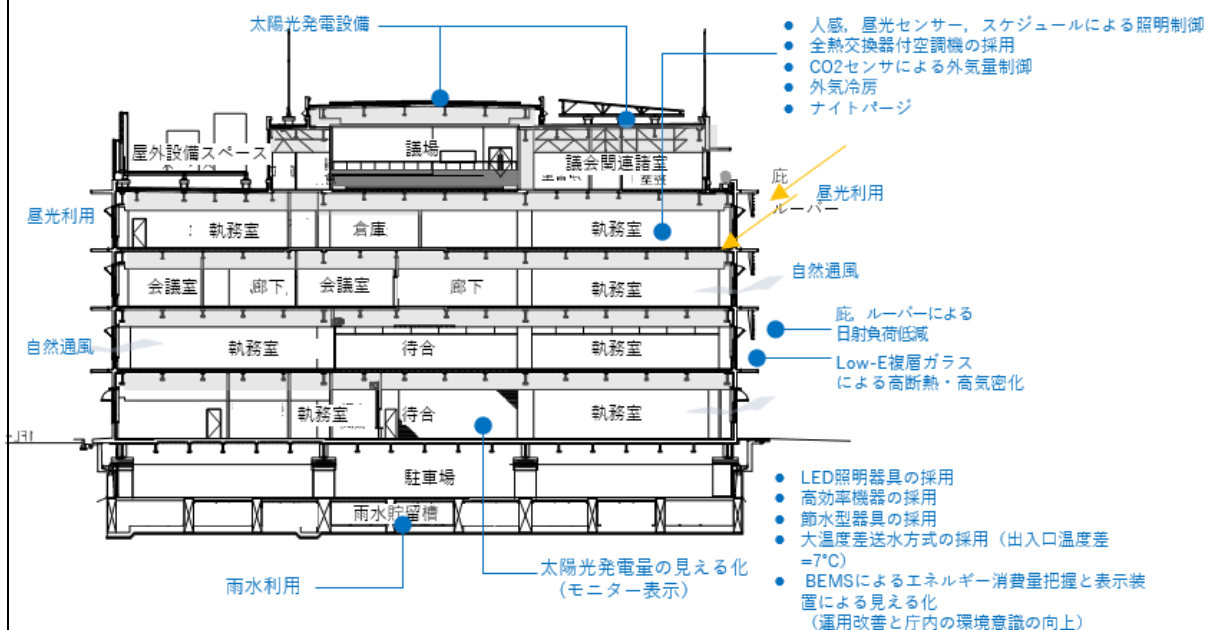


図2 環境配慮項目の模式図（北側）

3. 市民参加

―「新しい市役所の色を考えよう！ 体験型プログラム」の実施―

新庁舎の建設に当たっては、様々な市民参加のイベントを開催しながら事業を進めた。工事現場見学会を始め、敷地内の老朽化した既存桜を材料とした巣箱づくりワークショップ（以下、WS）、国分寺崖線に生育する樹木の葉を型紙に起こし駐車場の床にペイントするみどりの駐車場を作ろう WS、友好都市である長野県飯山市の杉材でベンチを作る WS 等、様々なイベントを実施したが、今回は実施設計の段階で新庁舎の外装の色を決めるため、市内小中学生を対象に計3日間実施した「新しい市役所の色を考えよう！体験型プログラム」について報告する。

本プログラムは、参加者の好みで色を決めるのではなく、色彩の専門家の仕事の進め方に触れながら、論理的なプロセスを経て、市役所の外装色を決めていくことを目的として実施した。

1日目は、「まちの色を見つけよう」というテーマで27名の小中学生が参加した。まず、色彩の専門家による環境色彩に関するレクチャーで、優れた景観には、建物にその地域独特の素材の使用であったり、地域の固有の色使いがあり、統一感やまとまりがあることを学んだ。

そこで「地域の色」を探すという目的で、7つのグループが「駅前、自然・歴史、近隣」という3つのコースに分かれて敷地周辺のカラーハンティングを実施した。周辺地域で採取した色をもとに各班で色を分析し、カラーパレット（景観を支える色＝ベース色、賑わいをつくる色＝アクセント色）を作成し、発表を行った。

2日目は、「色の組み合わせを考えよう」というテーマで29名の小中学生が参加した。専門家による環境色彩に関するレクチャーで、「地域の色」の建物への反映方法や色の組み合わせの考え方を学んだ後、1日目に作成したカラーパレットを用いて、グループワークにて新庁舎の外装の色彩を検討した。フォトモンタージュを用いて、各班の案を一つにまとめ、コンセプトと共にそれぞれの案の発表を行った。



写真2 カラーハント（駅前）



写真3 カラーハント（歴史・自然）



写真4 作成・発表したパレット



写真5 グループワークでの検討



写真6 2日目の案の発表の様子



写真7 各グループの提案した外装色彩

3日目は、「新しい市役所の色をみんなで考えよう」「テーマカラーを考えよう」というテーマで28名の小中学生が参加した。1・2日目の振り返りの後、グループワークにて新庁舎のテーマカラーを検討し、発表を行った。また、2日目に子どもたちが各班で作成した案のコンセプトやエッセンスを取り入れ、色彩の専門家が、外装色彩案として3案の提案を行った。子どもたちには各案からそれぞれの「推し案」を選んでもらい、代理対抗ブレゼンの後、投票を実施した。引率や見学のため会に参加していた大人も投票に加わり、「C案：木漏れ日グリーン」の得票点が最も高い結果となった。

「木漏れ日グリーン」は、武蔵野台地の木々をモチーフに、明るい茶系と緑陰をイメージした落ち着いたあるグリーンの配色となっており、国指定史跡である東山道武蔵路側と都立武蔵国分寺公園側で表情を切り替えることで、それぞれの景観環境にあわせて豊かな表情が感じられるように配慮したものとなっている。

この案に、3日目に挙げられた子どもたちの意見を踏まえた微修正を行い、塗装サンプルによる詳細な調整を経て、外壁の色を決定した。



写真8 採用案「木漏れ日グリーン」



写真9 3日目の開催状況



写真10 塗装サンプルによる色彩調整



写真11 西側（東山道武蔵道側）からの外観



写真12 東側（武蔵国分寺公園側）からの外観

4. おわりに

新庁舎建設は、コロナ禍で対面の打ち合わせをすることもはばかれる特殊な状況下で設計を進めた。また、急激な資材高騰や調達の長期化等様々な課題に直面した。しかしながら、事業者・関係者の努力や協力を得て、当初計画した工期通り、9月末に竣工引渡しを受けることができた。

現在は、令和7年1月の開庁に向け、準備を進めている。市民に親しまれる市役所を目指し、引き続き取り組んでいく。